
~ DESTINYブレイド ~

龍馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼DESTINYブレイド＼

【Nコード】

N3951A

【作者名】

龍馬

【あらすじ】

相反する二人の少年。相反する二つの組織。相反する二人の能力。自分の心が産み出した怪物により特殊な力“ability”を与えられた少年達の物語り。

第一話〜二人の少年〜（前書き）

この物語りは、基本的にはバトル物なのです。

小説初心者故に大変おかしな所もあるでしょうが、是非温かく見守って下さい。

第一話〜二人の少年〜

↓ DESTINYブレイド ↓

世界を壊したいと願い、人間を呪っている少年 “アキグサヤヒコ 秋草弥彦”

この世界が大好きで、守りたいと思っている “タカハシ タシロウ 高橋太四郎”
大半する二人だが、何故か二人は大親友だった。 …… 今日までは

…

「 …… 今日の授業何? 」

地元の高校に通う17歳少年、弥彦が横にいる茶髪の少年に話かける。

「 え〜と …… 体育と音楽と …… あとは忘れた 」

茶髪の少年がそれに答え、黒髪の少年に言う。彼も地元の高校に通う17歳の少年だ。

「 そか …… 」

（聞くだけ無駄だったか）と言いたげに、答える黒髪の少年弥彦。

「 何だよ? 怒ってるのか? 」

「 怒って無い 」

冷たく言い放つ弥彦 …… 彼はこういう性格なのだ ……

「 絶対怒ってるってえ〜 」

それに大半し、茶髪の少年太四郎は明るく気さくな性格だ。どう見ても普通の高校生の通学だ …… あと十分も歩けば、学校に着くであろう ……

第二話　黒い天使

暫く歩いた学校に着いた……

暫く学校で勉強した学校が終わった。

いつもと同じ日常……漫画だったらここで天使が下りてきて、自分に特別な魔法をくれるのに……

弥彦は学校が終わり、オレンジ色の空の中、一人帰宅に向かっていた。……太四郎とは、クラスが違い、太四郎は部活をしているので、帰りは別だ。

「はぁ……まだ、四時か……本屋にでも行こうかな？」

独り言を呟き、帰宅の道からされる。

……たいして面白くも無い漫画を三時間程読みふける……三時間を200円で売ったと思うと少し損な気がする。

今度は真っ直ぐ帰宅しようとする弥彦……しかし、弥彦は何かの気配に気が付いた。……つけられてる様な、気配に……

気付かれ無いように速や歩きをし、相手をまくように、細い路地に入る。

すると……

「秋草　弥彦だな？」

先回りされていた……黒いスーツにサングラス……そして二メートル近くある身長の方が四人……その中の一人が低い声で、弥彦に尋ねる。

「……違いますよ」

弥彦は意外と冷静に、ハッキリと答えた。手をゆっくりと学校の鞆に忍ばせる。

「やめたまえ……こちらは既に君の事を調べ上げている」

弥彦に尋ねた男が残念そうな顔をして首を横に振る……他の三人は胸の内ポケットに手を入れている。“あれ”が出て来そうだ。

「……なんですか？貴方達は？」

嘘がバレても至って冷静に……嘘をついた事を無かった事のように言う。

弥彦はまだ知らない……彼等が弥彦の元に下り立った黒い天使だという事を……

第三話〜黒と白の「オート」

「で、なんですか？」

大男を睨みつけながら弥彦が言う。

「我々は君に何も言えない。だが君にはついてきて貰う」

クソ……丁寧な言い方だが、結局はただの誘拐だ……やられた……
ハハハッ寄り道なんてしないで、さっさと帰ってれば良かった。
……そしたら今頃家でテレビでも見てたんだろうな。母さんゴメン！

「分かりました。ついて行きますよ！」

観念した弥彦は大男達に囲まれ、そのまま車に乗せられた……
その頃、部活の終わった太四郎にも何かが起きていた。

「高橋太四郎君だね？君についてきて貰いたい」

弥彦を連れていった黒服の大男達と同じ事を言う数人の男達が、
部活帰りの太四郎の前に現れた。

「あいにく……知らない人にはついて行くなって言われてるので」

太四郎は強気で言い返した。

「フフフ……君は正しいよ。私達も手荒な真似はしたく無い。だ
がね、今回だけはそうも行かないんでね！」

男達の一人が太四郎に向かって右手を突き出した。その瞬間……
……何かが歪んだ。そんな気がした。

気付けば太四郎はその場に倒れていた。

「優しく連れていけ」

男の内の一人が命令し、他の男達が、太四郎を近くに止めていた車へと乗せる。

弥彦と太四郎の身に同時に起きた事件、全く同じ内容の……ただ一つ違うのは……弥彦を連れて行った男達が黒いコートを来ていたのに対し、太四郎を連れて行ったのが、白いコートを来ていた事……それだけだ。

しかしこれが……この違いが後に世界を崩壊させる程の事件になるとは、この時はまだ……二人の男しか知らなかった。

第三話〜黒と白のノート〜（後書き）

非常に更新遅れてしまい、申し訳ありませんでした……

中にはメールをくれて、間違いを指摘して下さる方までいて……

こんな小説でも読んで下さってる方がいて、とても嬉しいです。

しばらく更新出来て無かったのですが、春休みに入ったので、最低一日一話更新していきたいと思います。

意見、感想等もお待ちしています。 m) (m

第四話〜忘れ無い名前〜

「つきました」

俺は今、黒コートの奴らに連れてこられて、どっかの地下らしき場所に連れてこられている。

「さあ、降りて下さい」

誘拐した癖に敬語？意味が分からない。なんだコイツら

「ついて来て下さい」

俺は奴らの指示に全て従った。

で、今はこんな所だ……

あたりは真っ暗で、何も見えない、大きな部屋。さっきまでいた黒コートの奴らもいない。一人にされてしまったのだ。正面に大きな椅子がある。しかしこの椅子……なんて趣味してるんだ？気持ち悪い……無駄に背もたれが大きく、その大きな背もたれには人の顔のような物が飛び出している。

俺がその椅子に見とれていると、声がかかった。

「お前が秋草弥彦……いや、ディアボロスか」
「へ？」

どこからだ？少し見回した。

……声の主発見。

椅子に座ってた。

「ククク……本当にまだ子供のようだ」

椅子に座ってる男は静かに口を開く。その声は、結構高かった。

「フフフ……これでやっと“ビプロイツ”と決着がつけられる」

男は椅子から立ち上がった。そしてその瞬間、弥彦の目の前に立っていた。

「うわぁっ」

普通に驚く。

コイツいつの間に……そういえば、椅子の時も最初は居なかった様な……見えなかっただけか？

「そう驚くな……俺とお前は仲間さ」

何言ってるんだコイツ？

「短刀直入に言おう、長つたらしいのは嫌いだ。……我々と世界を壊さないか？」

おいおいコイツ……直入しすぎだ……しかも意味が分からない。だが……俺はその時男の、キレ目を見てしまった。

そして何となく分かってしまった。コイツが本気であることを……良く分らないけど、前から思ってた事だ。この男に言ってみよう。

「俺は……この世界を壊したい！」

ハッキリと……そうだった。

「……そうか」

俺の答えを聞いたその瞬間、男はニイツと口を引き吊らし、不気味な笑みを浮かべた。そして

「ならば目覚めろ！」

男は右手を突き出した。

「う、ぐうあ！」

痛い！頭が割れる。何しやがった？死ぬのか……

俺の意思が薄れ行く中、男は笑ったままこう言った。

「俺の名は“シュドウ”覚えとけ……クククまあ忘れられないだろうがな」

俺はそのまま意識を失った。でも多分、この男の名前は忘れ無
いだろう。

……シュドウ

第四話〈忘れ無い名前〉（後書き）

とりあえず第四話書きました。

ちなみにこの小説は、弥彦の視点からと、第三者の視点からがゴッ
チャになる小説なので、読み辛いかも知れませんが、どうかご了承
下さいm(_____)m

第五話 弥彦と子猫

気付いた時……俺は家のベッドの上にいた……母さんに聞いたなら「あら、何を言ってるの？貴方は学校が終わって直ぐに帰って来たじゃない」
だつてさ。

でもそれは嘘だ。本当に学校が終わって直ぐに帰って来てたなら、財布から200百円減ってる事の説明がつかない、200百円が無のは、俺が学校帰りに漫画喫茶に寄ったからなんだから。一体なんなんだ…あの、シウドウて奴は……

と、そんな事を考えていると母さんから……

「ねえ弥彦、今日の夕飯カレーライスにしようと思ってたんだけど、ルーを買うの忘れちゃったから、買いに行ってくれない？」

はあ？なんでメインディッシュの材料を買い忘れるんだ？全くこの親は……でもまあ、少し外に出て気分転換でもするか？

「分かった。行ってくるよ」

「ありがとう。でも近所のスーパー“馬鹿売れ”は駄目よ、高いから。三丁目のスーパー“激安”に行つて来てね」

おいおい……三丁目は結構遠いぞ……それに値段だつて25円しか変わらないのに……文句言つても仕方ないか。

弥彦は服を着替え、母親から250円ジャストを貰い、母から見送られ、徒歩でスーパー激安に向かった。

「て、やっぱ結構遠いよなあ〜こんな時に限ってチャリパクられるとは……ん、あれは!？」

弥彦は何かを発見した。それは……数人の学生らしき者が、建物と建物の間の狭い場所で、まだ小さな子猫に向かってエアガンを放っているところだった。

「なんて事を……」

今直ぐににでも止めたい。だが、自分が何をしようと、あの学生達を止められ無いことは分かっていた。自分もボコボコにされ、猫も助からないだろう。と決めつけ、行動に移せ無い。弥彦は自分のこういう所が大嫌いだった。そして、自分より弱い物に当たり散らす人間の情け無い所も……大嫌いだった。

弥彦は何も見なかった事にして、スーパーへ向かう。腹の中に黒い何かが溜まる感覚がする。弥彦はこういう場面に出くわすと必ず、こうなるのだ……そして、あの時助けていればと後悔する。

ハッ、とんだ馬鹿野郎だな……秋草弥彦……お前はキングオブチキンだよハハハッ

……自分で自分を罵る。こうする事でしかこの気持ちを沈められないのだ。

弥彦は普通に買い物を終え、帰路に着いた。途中、子猫の事が気になり、子猫の居た場所に行ってみた。

「良かった……生きてた」

猫は生きていた。だが身体中怪我だらけで、一部の毛が、抜けていて、片目が潰れていた。

「酷い事するな……ゴメン、ゴメンよ……」

弥彦は涙を流しながら猫を抱き締めた。

第五話〜弥彦と子猫〜（後書き）

ふう〜とりあえず第五話です。

この話で、弥彦が人間を嫌いな理由なんかを少しだけ書けました。

そろそろバトルも行われます。

ちなみに、自分は一話書くたびに、後書きを書きます。

小説のついでに後書きもよろしく願います（笑）

第六話 無敵の破壊神

弥彦が抱き締めると、子猫は今にも消えそうな声で鳴く。弥彦には、痛い、助けて、酷いよ！と猫が言ってるような気がした。

「ゴメン……本当に……俺、見てたのに助けてあげられなくて」

猫はグツタリとしている……潰れた片目から血が流れだし、弥彦の服に付着する。

その時、後ろに何か気配を感じた。

直ぐ様後ろに振り向くと……そこには白いコートを着た男達が四人、弥彦を睨みつけていた。

なんだ？コイツら……あのシュドウて人の仲間か？白いけど……

すると、白いコートを着た男の一人が口を開いた。

「秋草弥彦……ディアボロスが覚醒する前に、死んでもらう！」

はぁ？いきなり何を言ってるんだコイツらは。そういえばシュドウも俺の事をディアボロスとか言ってたな……一体なんなんだ？

「悪く思うな、世界のためだ」

そう言っと、白いコートを着た男達の袖から、長いカギツメの様な武器が出てきた。そして

「殺れ」

リーダー格の男が言った瞬間、三人同時に弥彦に飛びかかる。

「う、うおお！」

とっさに子猫を床に寝かし、弥彦は走って逃げ出す。

「あいつら、イカレてる」

細い路地を突っ走り、少し広い場所に出た。しかし、絶望的な事に、そこは行き止まり……

「や、ヤバイ」

白いコートを着た男達が追いついて来た。

「観念しろ……貴様は危険過ぎる。この世界で生きていくにはな
男の一人が弥彦に話した。

「何か勘違いしてませんか？ 自慢じゃないけど、俺、相当弱いで
すよ」

何情けない事を言ってるんだ俺は？

「危険なのは貴様ではない、ディアボロスだ！」

そう言う一人の男が超人的飛躍力で、宙に舞、そして弥彦に向
かって急降下した。

「あっ・ぶ・ない！」

弥彦はギリギリの所で、後ろに飛んで助かっていた。

「クツかわされた！だが」

男はカギヅメを振り回し、弥彦に迫る。

「うわわ」

再び弥彦は後ろに下がって、爪を回避する。……しかし、ついに後ろに壁が来てしまった。

「マジか……俺はこんな所で意味分からない奴らに殺されて終わるのかよ」

ああ……なんて不毛な人生なんだ。俺は一体何のために生まれたんだ？理由も無く殺されるためかよ……

ああもう駄目だ……どうでも良い事考えてしまっつ。

『汝……いつまで寝ているつもりだ？』

汝が死ぬのは許されん

汝の命をかき消す者は、

我が爪を持って、消滅さす！』

あれ、何だお前？何処から話かけてる？

『我が力を持つものよ、見せてやる、我が力を！
神の力を！』

なんだよ……一体。

次の瞬間、血がまるで噴水のように吹き出した。

「な、馬鹿な……」

驚いているのは白コートの男達……吹き出した血の持ち主は、白コートの男の一人だ。

「ディアボロス！まだ覚醒していない筈だ！？なのに……」

リーダー格の男は驚きを隠せない。

『虫ケラごとき貴様らが、我に刃を向けた事……後悔させてやるっ』

弥彦が男達に言った。 いや、正確には弥彦の口から声が出ただけだ。

喋っているのは、弥彦では無い何か……

『我が名は“ディアボロス”唯一無二の、絶対的破壊の存在だ』

その瞬間、弥彦が目にも止まらぬ高速で移動、そして、三人の白コートの前に一瞬で現れた。

「なにい！？速いつ」

白コートの一人は焦りながらも、カギツメを掲げ、弥彦に振り下ろした。だが、

『貴様らが遅い』

弥彦は不適な笑みを浮かべ、カギツメより速く、右腕で男の頭を掴んだ。

「ぐ、ぐああ」

そして、なんと弥彦の腕が伸び、男をそのまま壁に叩きつける。建物のコンクリートが何枚も割れる轟音が響く。

「ぐわあああ！！」

そして最後に絶叫が響いた。

弥彦の右腕は既に人の物では無く、悪魔、鬼、怪物、そういった

類の醜い腕へと変化していた。

そして伸ばした腕を、引き戻す。男は持つておらず、手には血だけが残っている。

頭を握り潰したのだ。

『次は貴様だ』

弥彦の目がギョロつと動き、別の男を睨んだ。

「ひ、ヒイツ」

男はカギツメを振り回し、カギツメを弥彦の右腕に当てたが……当たった“だけ”だった。

高い金属音が響き渡り、カギツメは弾かれた。

『我が無敵の肉体に、傷はつけられん！』

弥彦は右腕の鋭い爪を男の心臓部に突き刺した。

男は声も挙げずに力無く弥彦の腕に貫かれたままになった。

『グワハハハ……戦い、久しぶりだ。』

もつと我を楽しませよ！』

貫いている男を放り飛ばし、最後のリーダー格の男を見た。

「ディアボロス……やはり恐ろしい力だ」

男の声は震えている……

『消え失せる』弥彦は右腕を男に向けた、そして呟く『デイストーション』

その瞬間、急速に右腕に膨大なエネルギーが収束し、暴力的な閃光が解き放たれた。

激しい爆音と共に、リーダー格の男、そしてその後ろの建物は全て光に呑まれた。

第六話〜無敵の破壊神〜（後書き）

まず始めに第六話を読んで下さり、誠にありがとうございます。

m () m

ふう〜今回やっとこの話の最も重要な人物？ディアボロス様が出て参りました。

彼？はめちゃくちゃ強いです。んでもってめちゃくちゃ危険です。

今回の話で、強い所は分かって貰えたかな？ 自分の書き方が未熟で、戦闘はイマイチだったかもしれませんが……もっとスピード感を出したい。

ま、とりあえず、今後の展開に期待して下さい。では〜

第七話　組織、ability、仲間

「あれは、俺か？どうなってる……」

弥彦の目には、自分の形をした怪物が、あの白コートを相手に戦ってる姿が映っている。

『汝、聞こえるか？』

我が名はディアボロス

我が名はディアボロス

我が名はディアボ……』

煩い、煩い…何だお前は、一体……

弥彦は頭の中が混乱する。一体ディアボロスとはなんなのか？自分はどうなっているのか？突如言い伝え様の無い恐怖が弥彦を襲う。こんな恐怖……今まで弥彦は受けた事が無い。

そして次の瞬間、弥彦は驚愕する『消滅せよ、デイストーション』

全てを滅ぼす悪魔の光が弥彦の拳底から放たれた。

それは自分を襲った白コートを呑み込み、更にそれだけではとどまらず、周りの建物も一緒に吹き飛ばした。

結果、弥彦の突き出された右手より前方に存在していた全ての物質は消滅した。

『まだ力が戻っていないな……長い間眠り過ぎたか』

最後にアイツは、ディアボロスは、俺の中でそう呟いて……それ

から……俺の意識はぶっとんだ。

「ククク、やはりディアボロスの力、凄まじい……だが、この威力は少々危険過ぎるな…使いこなせないのでは困る」

その言葉で俺は目が覚めた。

「なんの事ですか？シウドウ“さん”」

一応、本人の前では敬語使つかない……年上だし。

「気付いたか？」

シウドウは特徴的な口を引き吊らす笑みを浮かべ、ベッドに寝ている弥彦に言った。

「そつえば、ここどこ……じゃないっ!! シウドウ……さん、何か知ってるんでしょ、アイツを……ディアボロスを……」

珍しく熱くなる弥彦、シウドウはまた口を引き吊らせ笑い、弥彦に話す。

「ククク、まあディアボロスが目覚めた事だし。お前は逃げられ無いだろっから、教えてやるか」

シウドウは笑いながら言った。弥彦は真剣にそんなシウドウを見つめる。

「長くなるぜ、忘れないように良く聞けよ」

「忘れませんよ。シウドウさんの名前だって、覚えてるじゃ無いですか」

「クククッそうだったな、じゃ言っぜ」

そう言っつてシュドウさんは、話始めた。俺はこの話“も”決して忘れないだろう……

「まずは、俺達の事を少し説明してやるかな」

「あの黒コート達の事ですね」

「そうだ、奴らは“リヤクドウ”で組織の者だ。んで、驚ろくなよ……なんとそのボスが俺なんだ！」

弥彦は大して驚か無い、そんな事はなんとなく分かっていたから。

「リアクション薄いな……まあいい、で次にお前を襲った白コート共……奴らが“ビプロイツ”俺達の宿敵だ」

「ええと、なんで宿敵なんですか？」

弥彦が疑問を浮かべる。シュドウはそれに軽快に答えた。

「それは……俺達が世界を壊そうとしていて、ビプロイツが世界を守ろうとしてるからだ」

「なんでですか？」

弥彦は無邪気に聞いた。シュドウは……

「なんで？ 答えられねえよ」

ハハハ……良く考えりゃそうかもな……理由なんて人それぞれだ。

「じゃ、なんで俺がその……ビプロイツに襲われたんですか？」

「そいつは簡単……お前がディアボロスを持つてるから襲つて来たんだ」

更にシュドウは言葉を続けた。「んで、また襲つて来るぞ。

お前がディアボロスを持つてる限り」

「ええ！？」

「冗談じゃない！なんで俺がそんな危険な目に会わなきゃならないんだ！？」

「ディアボロスを持つてるから」

「……シウドウさん、貴方、心でも読めるんですか？」

「別に、ただお前がそんな顔をしてたから」

「まあいい、続きだ」

「はい……」

「まあ奴らがお前を……ディアボロスを狙う理由は簡単だ。それは危険だから……ただそれだけ」

「そんなの納得出来るか！！」

「ディアボロスはどうやって捨てるんですか！？いいませんよ、こんな危険な物」

「捨てる？冗談じゃない、折角現れたディアボロスを……それに捨てるなんて事出来ないしな」

「なんだとお！？何ふざけた事を……」

「そうだな……じゃ、次は“ability”について教えてやるか」

「あびりてい？」

「abilityてのはお前のディアボロスとかの事だ」

「待てよ……何かひっかかる。そう、“とか”だ。」

「待って下さい。もしかして、俺みたいなのは他にもいるんですか？」

「ああ八人いる。俺達リヤクドウ側に四人。ビプロイツ側に四人だ」

「……はあ、なんか頭こんがらがって来ましたよ」

「ちなみに、俺達リヤクドウは今二人 ability を持つものを発見した」

「俺を合わせて？」

「そう、お前ともう一人だ。ビプロイツの方は既に三人集まっているよ」

シウドウは、話がそれた。と言って別の話しだした。

「ability でのはその名の通り、能力だ。ディアボロスもその一種さ、だが、他の ability と違い規模が大きすぎる所以外はな」

はあ……もう駄目だ。これは漫画か何かかな？ リヤクドウ？
ビプロイツ？ ability？

いい加減にしてくれ！もう頭が痛い……

「すみません……少し寝かせて貰えますか？頭がこんがらがって来て……」

シウドウはまた笑って答えた。

「ああ、そうだな。流石に信じられないだろうし……まずは寝ろ」

「そうします……お休み」

弥彦は布団を被った。そしてシウドウは静かに部屋去って行った。

第七話〜組織、ability、仲間〜（後書き）

ふ〜疲れた。とりあえず第七話です。

この話で、世界感を少し出したいなと思っていたんですが、読み直してみたら、思ったより駄目駄目でしたね……

とりあえず、仲間四人で敵も四人なんだ。
て事だけ分かって貰えたら嬉しいです。

それとこの小説〜DESTINYブレイド〜の読者数が1000人突破しました。これからもどうぞよろしくお願いいたしますm（

）m

第八話　ルー無しカレー

シウドウが去った後、弥彦はあるものに気が付いた。それは

「あれ、テレビあんじゃない」

弥彦のいる部屋は、窓が一つも無く、小さな電球だけが、部屋を照らしていた。

「そういえば……今何時だ？」

ふと思いたった疑問。

確か……母さんにお使い頼まれたのが7時ジャストだったよな。んで、まあ色々あって……今何時だ？てか今日何日だ？

「そつだ」

弥彦はおもむろにテレビのボタンを押した。

電球だけで照らされていた部屋が、また少し明るくなった。丁度つけたチャンネルでは、ニュースがやっていたので、日付を確認出来る。

「ええ、と早く日付出ないかな……」

弥彦がテレビを凝視していると、念願の日付が画面に映り出された。

「うああああ！なんて事だ」

弥彦が驚いた理由は……そう、日付が既に次の日に移り変わっていたからだ。

「ヤバイ、流石に母さんも心配してるだろうな」

と、そんな事言ってる場合じゃない。早く帰らないと

弥彦はベッドから跳ね起き、横に置いてあったカリーのルーも、ついでに持ち、部屋のドアノブへ手をかけた。その時

弥彦の耳に、気になるニュースが流れた。

「ええ、昨夜8：30頃、東京都金井沢三丁目で起きた爆破テロと
思われる事件ですが、新たな事が判明されました。

警察の調べに寄りますと、爆破に使われた爆弾が従来の爆弾とは
比較にならない危険性があるとの事です。

爆破されて箇所を調べてみると、なんと、破壊されたのでは無く、
ただしくは、その部分だけが“消滅”したと言った方が正しいのだ
とか……」

弥彦はその後の話は聞かなかった、が、明らかに犯人は自分であ
る事は明白だった。

シヨックはでかい。なんせ、その当たり一帯がまるでクレータ
ーの様になっていたのだから……自分にそんな力があると思うと、
底知れぬ恐怖に襲われる。

だが、恐怖を降りきりテレビを消して、ドアを開けた。

ドアを開けたら直ぐに長い廊下だった。壁には所々落書きがさ
れていて、一寸先は闇といった感じの場所だった。幽霊が出て来
そうだ……恐れを成した弥彦は走って階段を二階ほど駆け降りた。
そしてついに出口が見つかる。

出て納得。そこは廃虚と化した病院だった。怖い訳だ……

「シユドウさん、なんて所に連れて来てくれたんだ」

しかし外に出てみればまだ朝だった。気分を入れ換えて、弥彦は走って自宅に向かう。

見たことの無い廃虚だったが、意外と近場だったらしく、直ぐに見慣れた場所に出た。

「ふう、安心安心……これなら直ぐに帰れそうだ」

その通り、直ぐに自宅は発見出来た。

急いで家に向かう弥彦……しかし、あることに気付いた。

流石に一日帰ってこなきゃ心配してるかもな……もしかしたら警察に電話なんて事も……ヤバイ、どうしよう。

「ま、まあいいか」

弥彦は自宅のインターホンを鳴らした。すると家の中から聞き慣れた

「ハア〜イ」

という声が聞こえる。

「あら、弥彦!？」

「ただいま……ごめん、色々あってさ」

何か言われる前に先に謝る。これは弥彦の得意技だ。

すると母は……

「あら、朝帰りなんて、貴方も“やるわね”」

弥彦の母、美恵子は笑いながら言った。

「ち、違うつつの!!」

「あら、でも顔赤いわよ、まさか本当に」

やめよう……からかわれてるんだ。相手にしたら敗けだ……

「まあそんな事より、何してたのよ！貴方のせいで私は一人寂しくルー無しカレーを食べたのよ……」

そこか？ たった一人の息子が一日帰って来なかったのに……

え？何かひつかかるって？ そうか、『一人寂しく』てどこか。

OK説明しよう。俺の父さんは小さい頃から出張ばかり……それも海外、で、いつも家にいないんだ。最後にあったのは10年前かな。だから母さんは女で一人で、俺をここまで育ててくれたって訳さ

「ああ、とりあえず説教は後にしといてよ、お腹減ってたんだ」とりあえず話を変えとくか。

「ああ、丁度食べ物あるわよ」

「本当！？じゃ、早くしてよ」

「分かったわ、弥彦は手でも洗ってなさい」
「おっけ」

よっし見事に、回避したぜ。じゃ、あったかいご飯に、ありつくとするかな。

手を洗い、速足で台所に向かった弥彦……そこに……

「ハイ、ルー無しカレーよ。 沢山食べていいからね」

そう、そこに出されたのは昨日のルー無しカレーだった。 最早
カレーでは無いが…… とりあえず一口……

「……………マジィ」

第八話〜ルー無しカレー〜（後書き）

ふう〜実は結構無茶苦茶な設定になってしまった第八話です。

僕の未熟さが良く出ていますね……

とりあえず今はちやくちやくと伏線を張り巡らせてます。いつか回収されるのを楽しみにして下さい。

では〜

第九話 赤い転校生 (前書き)

突然ですが、小説家になるうの、エラーで、中途半端な所で終わってしまつた第九話を書き換えました。

是非、もう一度第九話を朗読願いますm () m

ご迷惑おかけして誠に申し訳ありません。

第九話　赤い転校生

さあて、清々しい朝だ。太陽はキラキラと輝き、セミは大事なパートナーを見つげるために、懸命に鳴く。ちよつと五月蠅が、俺は好きさ

「弥彦、そろそろ学校いきなさい」

下から母の声が聞こえる。弥彦の部屋は二階なのだ。

「分かってるよ」

弥彦は制服に着替え、リズムカルに階段を跳ね降りた。

「じゃ、行つてきます」

「朝ご飯はあ？」

「いらね」

そう言つて、母の返信は聞かず、弥彦は外に飛び出した。

弥彦の向かう場所、そこは……待ち合わせ場所。そう弥彦が唯

一親友と呼べる男、高橋太四郎との……

「に、しても遅いな……あの太四郎が待ち合わせに遅刻なんて」

そんな事を思っていたが、10分待つても太四郎は来なかった。

仕方なく、弥彦は一人で学校に向かう。

たく……太四郎の奴、家は金持ちなのに、なんで携帯持って無いんだよ。て、これじゃ俺が学校に遅刻しちまう、走るか

全速で走る！走る！走る！学校の門が見えた。タイムリミットまで後1分……間に合うか！？頼むぜ俺の足。ヤバイ、駄目だ。もう間に合わない。校門の前には、金井沢高校名物“山中 大輔”が居る。そして門を閉めようとしている。ちつくしよお！これ以上遅刻したら単位が……

学校の時計の針が、8：40分を指し、登校時間に終わりを告げた。

門は既に山中により閉められている。間に合ったのか？

「おお、秋草。ギリギリだな」

え、何だつて？ギリギリ？……て、事は

「間に合ったのか！？」

気迫のある顔つきで山中先生を見つめ、俺は言った。

「ああ、セーフだ。さつさと教室へ行け」

山中先生は穏やかに言った。

アツハハ、ラッキーだ。後ろを向けば、ほら、遅刻した生徒達が山中に頭を下げているよ。爽快だ。

に、しても……俺、足速くなったな。50mを6秒くらいで走りきったかな？今までは9秒くらいかかったのに……ま、いつか。折角間に合ったんだ。早く教室へ行こう。

教室に着いたら、とりあえず寝たふりで一日やり過ごす……友達がいないと寂しいもんだな。

に、しても、今日はやけに騒がしいな……何の日だ？

と、その時、教室のドアが勢い良くスライドし、担任の先生が入って来た。

「ええ〜今日はホームルームの前に、話がある」

クラスの皆が、待ってました。と言わんばかりに、視線を先生に浴びせた。今日はこのクラスに……転入生が来る！」

歳をとったベテランの先生が、自分なりに盛り上げようと間を開けたみたいだが、それは無駄だ。何故なら、既に皆のボルテージはマックスだから……

まあ、俺は興味無いよ。女でも男でも……

「じゃ、入って来なさい」

担任の先生がそう言うのと、再びドアがスライドした。

そしてドアから入って来たのは……

真っ赤に染められた頭髪。そして髪と同じように真っ赤な瞳。と、いう明らかな不良少年だった。

「じゃあ、自己紹介して」

良く見ると、先生の額からは汗が、しみ出ている。

赤髪の転入生は軽く椅子に座る生徒達を睨みつけ、それから自己紹介をした。

「相羽 アイバ 葉月 ハズキ……よろしく」

ガンを飛ばし、強気に言い放った。

「ねえねえ、葉月君カツコ良くない？」

「えくでもちよつと怖くない？」

「そこが良いんだよあ〜」

女子達が騒ぎ出す…… 煩いな。

「そ、そうだなあ、じゃあ……席は弥彦の横が良いんじゃないか？」

「何い！？何言ってるやがる……こんな危険そうな奴を俺の隣に！！頼む、今からでも考え直してくれ……」

しかし、弥彦の願いは、叶わず。葉月の席は弥彦の横に決定した。

葉月が弥彦の横を通ったので……弥彦が一応挨拶をする。

「よ、よろしく。葉月君」

弥彦は手を差し出した。その瞬間、バチン！と音が響いた。教室中の誰もが何が起こったのか！？と、目を見張った。

「いつつあー！！」

「ケッ」

葉月は弥彦の手を思いつきり弾いたのだ。

「て……あ、ぐいぐい、ゴメン！」

あれ？俺悪く無いよな？なんで謝ってるの？

葉月は一斉に集まった視線を物ともせず、足を組み堂々と自分の席に座った。

「じゃ、じゃあ皆仲良くするんだぞ」
そう言って先生は足早に教室を出ていった。

ちよつと待て……仲良く？ 無理に決まってるだろ！

しかし、意外にも、その後の授業は、スムーズに終わっていく……
だが、いつもは騒がしい授業の間の休み時間が、異常に静かだ。
いつもは皆に相手にもされない弥彦だが、この時ばかりは、同情して貰えていた。

学校にチャイムが鳴り響く。

「はあ〜やっと終わった〜」

どうやら学校が終わった様だ。 どうせ明日も学校だが、弥彦は
とりあえず一安心。

気になる葉月は先に帰った様なので、気楽に帰れる。

さあて、帰るか……ん、いや、その前に……

「すみません、高橋太四郎君は今日学校に来ましたか？」

「ああ、たしか高橋は今日休みだったな」

「そうですか……」

唯一の親友の事を、太四郎のクラスの担任に、聞いておいた。

なんだよアイツ……休むなら連絡くらい入れてくれよ。

そんな事を思いながら、下駄箱へ向かう弥彦。

そのまま、帰路に着く。

訳では無く、寄り道をしようとして、家までの道とは違う方向へ進む。

あんな事があったのに、また寄り道なんて、俺も学習しないな……

弥彦はお気に入りの本屋（立ち読みOK）へ向かい歩いていた。

すると、あるものを発見。それは……

相羽葉月だ。

「へえ〜アイツ家この辺なんだ」

まあ、知ったこっちゃ無い。あんな気難しい野郎。だが、

いや、ちょっと気になるな……後をつけてみるか。

何故か葉月の事が気になった弥彦は、葉月を追跡した。

しかし、直ぐに後悔した……

「あれ？ここ……」

何故か？

「あの時の廃虚病院だ」

それは……

弥彦は物陰に隠れて葉月を凝視していた。

「おい、隠れて無いで出てこい！」

ゲツ、ばれてる………やばい、どうしよう。

しかし、その瞬間、弥彦を襲った白コート、“ビプロイツ”が、突如現れ、葉月を包囲した。

アイツらは！！ ……んで、なんで俺じゃなく、葉月が狙われてるんだ？

少し考えた。

答えは直ぐに出た。

「アイツがシュドウ………さん、の言っていた、abilityを持つ、仲間か」

ああ、面倒事に巻き込まれる前に………早く逃げよう。

第九話 赤い転校生 (後書き)

ふう〜第九話は、色々大変でした。書き換えや、続きが気になる書き方をしたい、と奮闘したりで……

では、評価してくださった方、読者の皆様、続きを楽しみにして
て下さいm (――) m

第十話↳ ability name dark-knight (前書き)

いきなりすいませんが、第十話を読む前に、書き直ししました、第九話の朗読をお願い、申し上げます。

第十話 〽 ability name dark - knight 〽

全く……寄り道なんてするから罰が当たったんだ……
失敗は成功の元？ 馬鹿言うな、失敗は次なる失敗への布石じゃないか……

どうする？ 俺にある選択肢は二つ……

- 1 葉月を助けるため、あそこに突っ込む。
- 2 葉月を見捨てて逃げる。

よし決めた。 2だ。

なんで俺があんな奴を助けなきゃならない？ そもそも俺が行って助けられる訳が無い。

弥彦が情けない事を頭の中で自問自答し、逃げようとした。 その瞬間！！

「うがあっ!？」

弥彦の右腕に激痛が走る。

な、なんだ……この痛みは……

弥彦は反射的に、葉月の方を見た。

白コートに囲まれていて、良く見えないが……なんと葉月も腕を、抑えている。

なんだ？なんで俺と葉月が……共鳴して痛がつてるんだ？

「ぐあああ……なんだ、この痛みは!？」

葉月は白コートに囲まれ、絶対絶命、と言った状態なのに、それに加え、謎の、左腕の激痛……
それを見た白コートは……

「この共鳴反応は、まさか!？」

そう言っけてキョロキョロと辺りを確認しはじめた。

そして……

「いたぞ！」

アイツは確か……秋草弥彦！ ヤバイ、ディアボロスだ!!」

ヤバイ、ばれた。

くっそ……どうしたんだよ右腕。

弥彦の右腕に、まるでもう一つの命が宿ったかの様に、ドクン、ドクンと、鼓動が刻まれる。

「アイツは……確か隣の席の」

葉月も弥彦に気付いた。その時、葉月は直感的に、この痛みが弥彦と共鳴しているからだ。と考えた。

「アイツは、まさか……シウドウが言っていた、俺と同じ……」

「どうする？ 二人が相手となると……」

白コート達が話始めた。

「こちらは30人異常はいる。それにディアボロスは未だ完全覚醒はしていない。

両方とも仕留めるんだ！」

ゲッ!? アイツら、俺にも向かって来た。チクシヨウ右腕、早く動け。逃げられないぞ……

「このお！？ 動けえ」

叫んだのは弥彦……では無く、葉月だ。 叫び声と共に、左腕を突き上げた。

「痛みが、消えた。 ……よっしゃあ！」

葉月の叫びで、弥彦に向かった白コートも、動きを止め、葉月を見た。

お、俺も痛みが消えた。 よし、今の内に逃げよう。

弥彦は隙をついて逃げようとした。 しかし……

弥彦に向おうとしていた白コートが、再び弥彦に突撃。 とてもじゃないが、逃げられそうでは無い。

うわああ、馬鹿！ こっちに来るなよ！！

そこで再び弥彦の中で二択が生まれた。

1 頑張って一人で逃げてみる。

2 葉月は戦える雰囲気なので、葉月に助けてもらおう。

どっちが安全か？ そりゃ、一人や二人……助けてくれえ！葉月く〜ん。

弥彦は向かって来た白コート四人に、自ら突撃。

「世界のために、消える、ディアボロス！」

白コート四人の手から同時にカギツメが飛び出した。

「う、うおお」

弥彦は雄叫びを上げ、突撃。白コートのカギツメが、弥彦に迫る。

「くらえ！」

白コートにむけて、いつの間にか握っていた砂をぶち撒けた。

「ぐわっ」

不意の一撃に白コート達の動きが止まる。

その隙に男達の間をくぐり抜け、葉月の所へ走った。

「アイツ、なんでこっちに来やがる!？」

葉月は煙たがる様に言った。と、その瞬間、自分にも危険が迫っている事に気付いた。

白コートがカギツメを振り上げ、自分に襲いかかって来ていたのだ。

しかし葉月は余裕の表情を浮かべ、

「いいぜえ、かかって来い」

楽しそうに笑い……

「出番だぜ」

貫け、ダークナイト！」

再び叫び、左腕を突き出した！ 突き出した左腕の前方には……カギツメを振り上げた白コートの男がいる。

そして次の瞬間、葉月の左腕は自分に襲いかかった白コートの男

を、貫いていた。

「行くぜダークナイト、こいつらをぶっ倒す」

葉月は貫いていた白コートを、前方に放り投げ、前にいた白コートの当てる。

投げつけられた白コートは、体制を崩し、後ろに後退りした。その隙を突き、葉月は左腕を突き出し、貫く。

葉月の腕は、“あの時”の弥彦の様に、人のものとは違う、何かに変形していた。

しかし、弥彦のものとも同じでは無い。

葉月の左腕は先端が尖った、槍の様な形をしている。

「はああー!!」

前方の男を、排除し、そこから脱出する葉月。

囲まれてままでは分が悪いので、一旦脱出するのは正解だ。

「ダークナイト……世界のために、消えろ！」

白コートが一斉に襲いかかる。

「雑魚共があー!! ぶっ、殺す！」

葉月は、武器と化した左腕を構え、白コートの軍勢と対峙した。

うわあ、何やってるんだアイツ、あんなに大勢……これじゃどっちも危険じゃねえか。葉月に助けを求めようとした弥彦は、葉月の無謀な行動に絶望した。

後ろを見ると、砂をかけて怯ませた四人の白コートも、自分に向かって来ている。

ヤバイ、もうダメだ。……………終わった。最近ヤバイ事ばかりで、ヤバイが口癖になってる……………

突如その場で動かなくなる弥彦……………

弥彦は無駄な事が嫌いだ。これ以上何をやっても無駄という事に気付き、生きる事を諦めたのだ。

「消える！ディアボロス」

白コートの一人が、弥彦にカギツメを突き刺そうとする。

カギツメが突き刺さる　その時、弥彦の頭に声が聞こえた。

『汝、何をしている？　目覚めよ』

我が名はディアボロス。

唯一無二の絶対的破壊の存在。

我が名はディアボロス

目覚めよ、我が主、秋草弥彦！』

また、これか……………

そう頭の中で呟いた瞬間、弥彦の意識は消えた。そして……………

「ぐはああー！！」

カギツメが突き刺さる寸前、弥彦が白コートの頭を掴んだ。その右腕は……………もはや人の物では無かった。

「くっ、離せ！」

白コートの男は、必死に逃れようと、もがいた。

「弥彦は静かに口を開いた。

『我を消すだと？』

我を誰だと思っている。

我が名は、ディアボロス！』

弥彦……いや、弥彦の体を借りたディアボロスが、不気味に言った。

『その貧弱な力で、我に齒向かおうなど……
愚の骨頂だ！』

ディアボロスが言った、次の瞬間、まるで花火のように血が飛び散った。弥彦の右腕は血で真っ赤に染まっている。

そして白コートの男は地面に倒れた。

その白コートの死体に、頭は無かった。

「くっ、ディアボロスめ……」

残り三人の白コートが、怯えながらもジリジリとディアボロスに近づく。

『何をしても無駄だ、我に牙を向けた事を悔い、消滅せよ』

ディアボロスは、足をバネのように曲げ、そしてその反動で、高く飛び上がった。

『まずは……』ディアボロスは空中で三人の中から狙いを付け『貴様だ！』

右腕を伸ばし、ターゲットとなった男の頭を掴み、そのまま地面に叩きつけた。

「ぐおおー！」

地面に頭を叩き付けられた、白コートの男は、泡を吹き、血を流している。

男の周辺の地面が、大きく凹んでいる事から、その一撃の重さが、感じ取れる。

ディアボロスはそのまま別の男に、落下の勢いを乗せた蹴りを加える。

「ぐはっ」

蹴りを喰らった男は吹き飛び、地面に伏せる。

『ククク、最後だ、消える』

ディアボロスは、最後に残った白コートの男を睨み、地面に叩き付けた男を、振り回した。

そして、最後に残った白コートの男に、叩き付ける。

それでバランスを崩した白コートの男に、伸びた右腕を突き刺した。

白コートの男は血を吐きながら、その場に倒れた。

ディアボロスは伸ばした右腕を戻し、首をある方向へ向けた。

それは……

「なんだ、アイツ……結構やるじゃないか。チツ、こっちは流石に、この数じゃきついで。不本意だが……」

お前、こっちを手伝え！」

葉月が戦っている場所。

「おい、早く、手伝……」

『ククク、虫ケラ共が……まとめて吹き飛ばしてくれろ』

ディアボロスは右腕を、葉月が戦ってる所へと向けた。

ディアボロスの右腕に、膨大なエネルギーが集まって行く。

「な、おい……お前」

『消滅せよ、デイストーション』

右腕から放たれた、膨大なエネルギーは、全てを消滅させる悪魔の光として、一直線に狙った方向へ進行した。

「馬鹿野郎！俺まで巻き添えにする気かよ！？」

葉月の叫びも虚しく、消滅の光は進路を曲げる事無く突き進む……

…

第十話〜ability name dark-knight〜(後書き)

ふ〜、第十話です。

本当は葉月の活躍する話だったのですが、イマイチ葉月目立って
ませんね。

それよりナイトのスペルあってるんでしょうか？

何しろ学が無いもので……

まあ、良いか。ではまた十一話で会いましょう(笑)

第十一話 消滅の神VS闇の騎士

消滅の光は、進路をも削り取りながら、一直線に突き進んだ。

「なに、考えてるんだよ!! あいつぁ」

葉月が驚きを隠せない表情で硬直している。

葉月と戦っている三十人ほどの白コート達も、焦り、急いで回避行動に移る。

光は、葉月達がいた空間を呑み込み、そのまま後ろに控えていた、廃虚病院をも吹き飛ばした。

「ククク…まだ、生き残りがいるか」

ディアボロスは辺りを見回し言った。周囲は煙に包まれていて、視界は非常に悪い。

「っの」

煙から何かが飛び出した。

「馬鹿野郎! 俺まで殺す気か!?!」

葉月だ。葉月は、右腕で弥彦の襟首を掴み上げ、宙に浮かせ、武器と化した左腕を、弥彦の頬に近付けた。

「学校で手を叩いたのは悪かったけど……お前はやり過ぎだ!!」
葉月は怒りをあらわにして、弥彦を怒鳴りつける。

「貴公は……ダークナイトか。」

「貴様の様な、道を外れ落ちぶれた騎士が、我に牙を向けるとは……何事だ!」

「なっ お前、……一体」

『貴公も消してくれる!』

ディアボロスは、足を大きく振り上げ、そして葉月を蹴り跳ばす。

「ぐはっ」

葉月は地面を擦りながら吹き飛び、数十メートル飛ばされてから、止まった。

「の、野郎お……俺を怒らせたな」

葉月は立ち上がり、左腕を構えた。

『面白い、歯向かうかダークナイト』

「死ねえ!!」

地面を蹴り加速、左腕を突きだし弥彦を串刺しにしようとする。

『貴公の攻撃など、避ける必要すら無い』

ディアボロスは右腕を差し出し、葉月を迎え撃つ。

「なめるなあ!!」

一気に撃ち出された突きは、ディアボロスの右腕に当たった。

だが、高い金属音が響き渡り……ディアボロスの右腕は無傷。

「な……に」

『消える』

自分の攻撃が効かず、動揺し、動きを止めた葉月に、ディアボロスは左腕でパンチを繰り出す。

「つつ」

葉月は間一髪、右腕でパンチを受け止めた。しかし

「ぬぁっ！」

再び衝撃により吹き飛ばされる。

「つとお……どうなってんだ。abilityは右腕だろ……なんで普通のパンチでこんなに吹き飛ばんだ」

葉月は見事着地し、疑問を浮かべた。

それもそのはず。通常、abilityは体の一部が変形して武器となるもの。

そして武器となった部分には、そのabilityによる様々な……その名の通り、“能力”を得ることが出来るのだ。

しかし、それはabilityの部分だけ……葉月であれば槍となった左腕“だけ”に能力が宿る様に……

つまり、生身の部分で、あれほどの攻撃力を生み出したのは、不思議でしかないのだ。

弥彦の体はどう見ても、先程の一撃を繰り返せるとは思え無い程、細く、貧弱なのだから……

「ダークナイト……“あれ”をやるっ」

弥彦はポツリと左腕に話かけた。

それに呼応するかのようには、葉月の左腕は、赤く、燃え上がり、炎を身に纏った。

その炎は葉月の髪と、目と、同じ赤色だ。

「俺を怒らせた罰だ。……燃え尽きる……」

葉月は燃え上がった左腕を突きだし、猪の如く弥彦めがけて突進。

『愚かな……そのような攻撃は無駄だと、何故気付かぬ』

ディアボロスは右腕を葉月に向けた。そして『デイストーション』

あの破壊の光を発射した。

「ごっのおー!!」

葉月は捨て身のつもりで、弥彦の心臓をめがけ槍を伸ばした。しかし、その一撃を避けたディアボロスは、デイストーションの狙いをずらした。

消滅の光は空を切り、空に浮かぶ雲を切り裂いた。

『くう、まだ不完全か……そろそろ中に戻され……』

突如ディアボロスの体が動かなくなる。それを見た葉月が、

「貰ったあ!」

飛び上がり、心臓をめがけて槍を突き出す。

『この体に傷はつけられない……』

ディアボロスは最後に右腕を盾にして、葉月の攻撃を防ぐ。

燃える葉月の槍は、硬質な金属よりも硬いであろうディアボロスの右腕を貫き、燃やし、切断した。

ん、おお、やっと意識が戻って来た。一体、俺はどうなった？
生きてるのか？

「これで終わりだああ!!」

葉月が槍を弥彦に突き刺そうとしている。

て、おいちヨットオオ!なんだこりゃあ! 起きてそうそう、殺されそうだ!!

「たつたつ……タァーイム！」
んな事言つて止まる訳ないか……俺、死んだ。

「え？」

葉月の動きが止まった。

止まってくれたあああ！！

「えと、あの……」

弥彦は目を涙ぐませながら……

「ありがとう！」

葉月に礼を言ってしまった。
開け呆然としてしまった。

葉月は、突然の豹変ぶりに、口を

第十一話 消滅の神VS闇の騎士 (後書き)

今回はもうちょっと長く書きたかったのですが、色々あって少し短くしました。

んーなんか同じ表現の使い過ぎが、少しテンポを悪くしてるよう
な気がします……

第十二話 疑問の応答

「お前……なんのつもりだ？」

葉月が声を低くして言った。

「なんのつもりも、なにも……俺、今まで気を失ってたんだけど」

と、弥彦の目に、ある光景が飛び込んで来た。

それは、半分崩壊してしまっている廃虚病院……そして、廃虚病院までの地面。

「こ、これは……」

弥彦は、その光景

を見て驚愕している。その姿からはとてもとぼけてる様には見えな
い。

コイツ、覚えていないのか？

「あれ、葉月……君？がやったの？」

一応君付けで、弥彦は葉月に質問する。
すると葉月は

「お前が、やったんだよ！！覚えてないのか！？」

怒気を含んだ声で、弥彦に答えた。

「……やっぱり。また俺か」

「そっぴゃあ」

葉月が何かに気付いた。

「三丁目の、テロ事件と言われていた、あれは……お前だったのか
！？」

「ああ……そうだよ。今みたく白コートの奴らに襲われてさ、で意識を失って、気付いたら、こんな風になってるんだ」
「意識を失う、か。おかしいな……俺はabilityを解放しても、意識を失った事なんて一度も無いぞ」

弥彦が、

「え？」

と口を開けた瞬間。

葉月が突如横に吹き飛んだ。

「ぐふうっつっ!!」

「葉月!……君」

弥彦は素早く、横を振り向いた。

そこには、ボロボロの白コートをはおった、二メートル以上はある巨大な男が、立っていた。

「く、」

弥彦はとつさに右腕を構えてみた。

「て、うわああああ!!」

と、いきなり絶叫。

右腕がねええ!!

今頃右腕が無いことに気付いた弥彦。そんな弥彦に葉月が声をかけた。

「大丈夫だ!右腕はお前のability……直ぐに再生する!!今は逃げろ」

葉月は、地面に伏せ、横腹を抑えながら叫んだ。弥彦はとりあえず、巨大な白コートから距離とる。

白コートは、何故か動かない。

「葉月、君……大丈夫？」

「肋骨が折れてるな……だが、少ししたら回復するはずだ。 a b
ilityの部分では無いからちよいと時間はかかるけどな、それ
と……“君”はいらない」

「うおおっ!!」

弥彦が驚いた顔で、声を上げる。

理由は……弥彦の右腕がいきなり再生したからだ。

「おいおい、俺もう人間じゃ無いのか？ 切れた部分が勝手に生え
てくるなんて……てか何で右腕無くなったんだ？」

「ま、まあそれは置いとけ」

葉月が焦った様子で、言った。

「まあ、いいや。 それより、どうするの、これから」

「勿論、あのデカブツをぶっ殺してやるさ」

随分血の気の多い奴だな……だから髪が赤いのか？

その時、

「ドン!!」

という音が響き渡り、弥彦と葉月は同時に、ある方向を振り向いた。
そこには、もの凄いスピードで迫り来る、巨大な白コートの姿が
あった。

第十二話「質疑の応答」(後書き)

本当は巨大な白コートを倒して終わるつもりでしたが、一応今回は、ここまでにしときました。

それと昨日更新忘れてましたね……

そしてついに「DESTINYブレイド」のアクセス数が2000人を突破しました。

皆さんこれからもよろしくお願いいたします。m()m

第十三話 不死身の巨体

「ゲツ、来たぞ」

「お前は逃げるっ！俺は動けな……」

巨大な白コートは、両腕から長いカギツメを取り出し、二人に襲いかかる。

「ぐふっ……」

白コートは、葉月を思い切り蹴り飛ばし、そのまま弥彦にカギツメを振り下ろした。

「わあっ！」

しかし、その攻撃をギリギリの所で伏せてかわした……否、尻餅を付いて避ける事に成功する。

「じよ、冗談じゃねえぞ……」

弥彦は顔をひきつらせ、苦笑いを浮かべる。腰が抜けて立てない……

巨大な白コートは、そんな弥彦に情けを与える姿をみじんも見せず、腰が抜け、動けない弥彦に狙いを定め、再びカギツメを振り下ろす。

今度こそ終わった。……俺の人生がね

が、その瞬間……白コートの男の腹部から何かが勢い良く突き出した。

それが何かは、直ぐに分かった。

葉月の左腕の、槍だ。

「はあ、はあ……おいデカブツ……俺を忘れるなよ」

いくらか体が回復した様子で、葉月はニヤリと嫌味な笑いをした。しかし白コートは、葉月の一撃が全く効いた様子が無く、平然と立っている。

他の白コートの男達と違い、顔面がマスクで覆われていて表情が確認出来ないので、ダメージを与えているのか、確認出来ない。

「なんだデカブツ……お前不死身かよ」

「……目標相羽葉月、ターゲットは……抹殺する！」

ピピピピツという機械の音と共に、白コートは槍を引き抜き、葉月に顔を向けた。

チャンス、今のうちに逃げれるか？

……駄目だ、腰が抜けて歩け無い。我ながらなんて情けないのだろっ……

「おらああっ！」

向かってくる白コートに葉月は槍を構え応戦する。

白コートが、両腕のカギツメを振り回し、葉月に怒涛の攻めを展開する。

この状況は、武器の性質からして葉月が不利だ。

槍はリーチが長く非常に協力的な武器だが、その分小回りがきかない、俊敏な動きをする相手と素早い武器には滅法弱いのだ……

葉月が今戦っているのは、見かけの割に非常に素早く、更に素早い連続攻撃が得意なカギツメを持つ相手という、正に弱点そのものだ……

「うづくぐ……」

最早防ぐだけで手一杯の葉月……この状況、猫の手でも借りたい気分だ。

「くっそお……」

葉月はカギツメの剣線を見切り、迫るカギツメを伏せてかわす、そして……

「おらあああっ！！」

槍を横に薙払うようにして、白コートに叩きつける。

その衝撃で、白コートはその巨大を浮かび上がらせる。

そこに葉月が追撃のショルダータックルをお見舞いする。大した威力は期待出来ないが、空中で攻撃を受け、白コートは地面に倒れる。

「ふう……ふう」

葉月は息を整え、そして……

倒れている白コートの心臓部分に、槍を突き刺した。

「はあはあ、どうだあ」

「おお、アイツやりやがった。俺も歩けるようになったし、めでたしめでた……」

少し距離を置いた所で見ていた弥彦が呑気な事を言った、その瞬間

……白コートのマスクに隠れた目が緑色に光輝き、白コートの太い腕が、葉月の槍を掴み、引き抜こうと動き出した。

「な、おいおいマジで不死身かよ」

ゲッ……まだ終わらないのかよ！？

第十三話 不死身の巨体 (後書き)

久しぶりの更新です。大学が始まりチョット忙しく、これからも更新は不定期になってしまいそうです……

更新していない時にも、小説を読みに来てくれる方がいるのは、嬉しい反面、チョット罪悪感を感じたりもしました。

それと……もしも機会があればARMSという漫画を読んでみる事をオススメします。

DESTINYブレイドのイメージが分かりやすくなる反面、失望しますよ(笑)

第十四話　血の気

完全に急所を付いた攻撃を与えたはずなのに、全く効果が見えない敵に葉月は苛立ちを感じる。そして同時に恐怖という不安を葉月に与える。それは近くで見ている弥彦にも同じ事だ。

ヤバイ…多分今までで一番ヤバイ。

基本的に漫画等では量より質が優先されるものだ。（普通なら……質より量であるが）

あの敵は見るからに他のビプロイツの奴より格、実力が上だ。そして葉月に素早い連続攻撃を仕掛けた事から、移動速度が速い事も分かる。

このままでは逃げる事も出来ずに殺されてしまいかもしれない。

と、葉月はあるものに気が付いた。それは自分がぶち抜いた白コートの左胸部。そこからは火花が飛び散り、様々なケーブルや電球が何かを供給するプラグの様な物が見える。

それを見て葉月は安心した。

不死身では無い　と。

「だったらあ、粉々にぶっこわしてやるだけだろお!!」

葉月が起き上がった白コートの頭に槍を繰り出す。

すると白コートは目を輝かし、カギツメをクロスさせ槍を防いだ。更に攻撃後に出来た大きな隙を付き、白コートは葉月に蹴りを放つ。

「ぐう…!!」

再び葉月は吹き飛ばされる。葉月の顔は痛みで歪んだ、が、その直後ニヤリと笑った。

もしかしたら　と何かが閃いた。

「試してみるか…」

やるぜ、ダークナイト」

クスクスと笑いながら葉月は左腕に話かけた。その瞬間、槍に炎が宿る。そして、地を蹴り一気に白コートへ突撃する。

「大体決まってるよなあ、不死身のキャラってのは…」

突撃しながら葉月は挑発するように白コートに言う。

「弱点があるっ、てのがなあ！！　んでっ」

葉月は更に続ける。

「大抵弱点はあ…頭だよなあ！　おい！」

叫び終わり、葉月は大きく飛び上がる。

そして、頭に向けて槍を振り下ろす。

「燃えるお！！」

白コートは葉月を冷静に見つめ、カギツメをクロスさせる。先

程と同じように攻撃を防ぎ、カウンターを与えるつもりだ。

「馬鹿が、同じ手を何度も繰り返すかよおお！！」

燃える炎の槍は一直線に、目標を遮るカギツメへと向かう。

槍は…カギツメと激突する。しかし、弾かれる事は無かった、槍に宿る炎はカギツメに乗り移り、一瞬にして溶かし水の様なドロツとした物質に変化させた。そして…槍は白コートの男は捉えた。

第十四話　血の気（後書き）

ふう　今回はタイトル考えるのに凄く時間がかかりました。
て、事で全く関係無いタイトルになってしまいました。……では
また、

第十五話〜プロローグ終結〜（前書き）

もの凄く久々の更新です。なんか書き方を忘れてしまい変な感じになってしまいました。これから調子を取り戻していこうと思います！

第十五話〜プロローグ終結〜

物質を形成する原子。全ての物質は原子が集まり形成される。

葉月の槍が敵を頭から貫いている。

原子の単位から燃やす事が出来る炎……それは形状を保つ事を許さず、触れた物を液体に変える。

つまり防御不能。これが葉月の *ability*、ダークナイトの能力だ。しかし葉月自身もまだ *ability* が目覚めてから一ヶ月程度で扱い方が不安定なため、この“原子焼失”の炎を使うのに非常に体力を使うため連発は出来ない。

今日はこれで二度目、白コートを液体に変えたのを確認し、葉月は体力の消費を抑えるために、*ability* を戻した。葉月の左腕は、人間の物に戻っている。

「おい！」

少し休憩を入れてから葉月は地べたに座りながら、すかさず弥彦に声をかける。

「お前さつきはどういうつもりだったんだ？」

「どういうつもり？さあ、俺に聞かれてもねえ……」

「いや、何が？」

「何が？ じゃねえ！俺に襲いかかって来た事だよ！」

「そうだ、聞かなきゃならない事がある。」

「君は、なんでその…… *ability* を使っても意識があるの

？」

「俺の質問は無視か!？」

「ああ、ごめん相羽君。俺、あの時気を失ってて…いや、意識はあったんだけど、体と心が離れてるような感覚だったから」

それを聞き葉月が反応した。

「気を失った?そんな事、俺は一度も無かったがな…それと、君はいらねえ」

なんだ、知らないのか。今度シウドウから聞いてみよう。

「葉月、で良い」

「じゃあ葉月…君はシウドウの組織の人間なのか？」

「ん、ああ…俺も良く分からない。シウドウの奴はビプロイツに狙われて死にかけた俺の前にいきなり現れて、俺を助けたと思ったら俺にabilityの使い方を教えて、それっきりだ。俺に、お前は仲間だ。みたいな事を言っていたけどな…」

「なあ、じゃあabilityて何だ？」

「いきなりなれなれしくなってるな…abilityについては俺も知らない。まあ、超高性能な“武器”でいいんじゃないか」

「武器…か、葉月のabilityは物を溶かす力があるのか？」

「ああそうだ。原子焼失の力がある」

「原子焼失!?!?!?!」

じゃあなんで液体が残るんだ？」

「そ、それは…」

葉月はしばらく頭を抱えて考えこんだ後、

「わからねえ」

と答えた。

第十五話、プロローグ終結（後書き）

今回はサブタイトル通り、プロローグ終結です。

今までの話はプロローグみたいなのだったので、本当は十四話で終結させても良かったのですが、五の倍数で終らせなかったのが、無理矢理引き延ばしました。

これからはなるべくテンポ良く進めて行きたいと思います。

第十六話 出会いと襲撃、そして後悔

「行ってきまゝす」

弥彦がいつもの様に家を出る。あの戦いの後、葉月と暫く話、それからは何も無かった。だからいつも通り学校へ向かう。

そういえば、もうすぐ夏休みだなあ……今年は何やら色々疲れたからゆっくり休みたいな……

そんな事を考えながら弥彦が学校へ着くと、なにやら騒がしい。騒ぎの中心になっていいる所へ弥彦も行ってみる。正門の直ぐ近くに生徒達が輪を作っている。それを押し退け前に出るのは一苦勞だ。

「はあっ、やっと前に来れた……て、ぐわあっ！」

前に出た瞬間、弥彦に人が飛ばされて来た。

「つう」

弥彦は飛ばされて来た人物の顔を見る。坊主頭にソリを入れていて眉毛も無く、制服をボロボロにしているその姿はどう見ても不良だ。しかしその不良は鼻血を吹き出し、前歯が折れていて、泡を吹いている。

既にやられているのだ。

コイツは確か三年の学校で一番強いと噂されている徳間 元か……

……コイツをぶつとばすなんて一体誰が……

と、その瞬間脳裏にある人物の姿が浮かび上がる。

「自分から喧嘩を売っておいてもう終りか？」

聞いた事のある声。

「葉月!!」

「よお、弥彦」

葉月は何事も無かったかのように弥彦に話かける。

その後継を見て周りを囲んでいた生徒達は絶句する。

それもそのはず、クラスで一番暗く不気味な雰囲気をかもしだす弥彦と、三年生を軽くあしらう強さを持つイケメン不良転校生葉月が仲良く話しているのだ。

と、弥彦はその視線に直ぐ様気付いた。

ああ〜！やばい注目浴びちゃってるよ……確かにこのコンビは異色かもしれないよな……

「うわっ」

弥彦は突如何かの突進により吹っ飛ばされる。『何か』とは女子の群れだ。その中には二年生だけで無く、一年生や、三年生の女子も交じっている。

「うおお…凄い人気だな葉月」

弥彦は独り寂しく、背中に哀愁を漂わせながら歩いて行く。その姿はさながらリストラされたオッサンの様だ。

弥彦が教室へ向かうべく学校の廊下を歩いていると、一人の少女と肩をかすめる。

「あ、すみません」

相手の顔も見ずに弥彦は直ぐに頭を下げ謝った。しかし、返事が返って来ない。弥彦は頭を上げてみる……

少女は弥彦を無視し歩いていた。

「んだよアイツ……態度悪いなあ」

その少女は茶髪で背が高いモデルの様な体型なのが、後ろ姿から確認出来た。良く見ると周りにいる男子達がコソコソと何かを話している。

「やつぱ“宮城”さんは可愛いよな」

「いや、寧ろ美しい！」

「いや、寧ろ萌える!!」

「いや（ry」

なんだ？やつぱ人気なのか……でもやつぱり人は中身だよなあ、ぶつかつといて謝罪の一つも無しに行っちゃうなんて……忙しかつたのか？

「でも宮城さんの魅力はあの冷めた性格だよな」

「いやあくもうちよと優しい方が可愛いと思うよ。なんかトゲトゲしいんだよな、言動とか」

「馬鹿が！きつとツンデレなんだ、やはり萌える……」

なんとなくどんな人物なのか想像出来た。ま、顔は普通で良いから優しい子が俺は好きさ

……なんて人を選べる人間じゃないな、俺は

教室に入り自分の席に着く、暫くすると先生が入って来た。HRの始まりだ。先生が話を始めると遅刻して遅刻して葉月が教室に入ってくる。何やら制服がよれよれになっていて、女子達にもみくちゃにされた様子だ。

女子、恐るべし！

「遅いぞ相羽！」

先生が注意する。

「うつせえんだよ先公が！」

不良の代名詞の様な台詞を吐き葉月は席に着く……俺の横の席に

……

先生は口を開けて暫くポカーンとしていたが、気を取り直し話を続けた。

夏休みまで後四日だそうだ。

HRの後、俺は教室を出て別のクラスに向かった。親友、太四郎のいるクラスだ……しかし

「え、高橋？今日も来てないよ」

クラスの人に聞いてみたところ、太四郎は学校に来ていないようだ。二日来ていない……普通は風邪かなんかだと思うのが普通だが、弥彦は深く考える。

太四郎が風邪をひいた事は今まで一度も無かった。それに人当たりが良く皆に慕われ、責任感や正義感の強い太四郎の事だ、虐めや不登校なんて事は無いだろう。

何かあったのか？今日は帰りに太四郎の家に寄ることに決めた。

学校が終わり弥彦は太四郎の家に行こうとした。

「弥彦！」

何かが弥彦を引き止める。葉月だ。

「なんだよ？俺今日行くとこあるんだけど」

「何だよ、用事あんのか……じゃあいいや。またな、殺されるなよ」
葉月は笑いながら言ったが笑い事じゃない。

葉月の家は学校から30分程度だ、弥彦はゆっくりと歩いて行く。

太四郎の家に着いた、インターホンを押すと太四郎が出てきた。

親は今出かけていていないのだと言う。

「ああ、弥彦」

「太四郎どうしたんだ？学校来てないけど」

「ん、ちよつと風邪ひいちゃって」

「お前が！？珍しいなあ」

「うん、生まれて初めて風邪をひいたよ。あ、御見舞いに来てくれて悪いけどまた今度ね……薬のせいで眠くて……」

「そうか、じゃお大事に」

普通だった。ちよつと元気が無かったが、気にする程の事でも無いだろう。

帰りに寄り道することに決めた。何処へ行くかは決めて無いが、とりあえず何処かへ行きたい。時々こういう衝動に駆られるのはゲームや漫画のせいだろうか？

弥彦は電車に乗り、少し田舎チックな場所へ降りた。自分の家から三駅しか通って無いのに、雰囲気がるで違う。

いつもと違う場所に行くとは何かワクワクする。弥彦は人通りの少ない路地を歩いた。狭い道だが車も少なく、歩くには最適だ。だんだんと太陽が落ちてきて星が見えて来る。そろそろ帰ろうか？そう思った矢先、後ろから気配を感じる。

確実に付いて来ている。

まさか……弥彦は思った。
そして、予想は的中する。

弥彦は後ろを振り向く。すると後ろから紫のコーナーをはおった男三人が現れる。

またか！やつぱ寄り道なんかしなきゃよかったあああ！
後悔後に立たず……そんな言葉あったかな？

「なんですか？」

弥彦はビクビクしながらも尋ねる。

しかし男は答えなかった。かわりにポケットに手を突っ込み、拳銃を取り出す。

そして弥彦にめがけ発砲する。サブレッサーを付けているのか、発砲の発砲時の音は空気が抜けるような音だった。

反射的に体をくねらせ、弥彦は弾をかわした、男はそれに対し舌打ちをする。

「やはり拳銃では……」

「仕方がないだろうこんな町中では」

「うるさい、俺は一撃で殺したかったんだ！」

「奴は ability だ。拳銃じゃ当たったとしても殺せないさ」

なんなんだあの連中は？ピプロイツなのか…それにしても
と雰囲気が違うような…とりあえず銃を持つてるんだ、今は逃げない
いと。

「逃がすか！」

男は銃を撃ち弥彦の道を遮る。

「うわあっ」

「貰った」

弥彦が戸惑っている瞬間に、もう一人の男が弥彦に接近し、蹴りを浴びせる。

「痛っ」

蹴りを放った男は、弥彦が吹き飛び、地面に着く直前に銃を撃ち追撃を加える。

しかし、弥彦は空中で地面に手を付き、手で地面を押し返し翔び上がり銃弾を避ける。

「なんだと!？」

地面に着地した弥彦は呟いた。

『そんな玩具で我を殺す気か? 笑止!』

弥彦、否ディアボロスがそう言い、右腕を変化させる。ディアボロスは変化した右腕を見て不気味に笑う。

「く、やはりディアボロスが現れたか……ビプロイツとの戦いで秋草弥彦は命の危機が迫るとディアボロスが現れると分かっていたが…… 本当だったか」

「こうなることは分かっていた。これより目標を抹殺する」
「了解」

男達は両手に銃を構え発砲していく。

しかしディアボロスは右腕を盾にし、銃撃をかわしながら接近する。男達は散開し三方向から銃撃を見舞う。

『ござかしい』

一人の男に狙いを付け、右腕を伸ばし捕えようとする。

男は銃をしまい、剣を取り出した。迫るディアボロスの腕に剣をぶつける。しかし剣はディアボロスの腕に弾かれてしまう、しかし、その衝撃で男は迫る腕をかわす。

その間に他の二人が隙だらけのディアボロス銃で攻撃する。しかし、生身の部分に当たっているはずなのに、弾が当たって出血するが直ぐに再生してしまう。

「なんだと！？どうなっているんだ」

「分からない…が、銃は効かないと言うことは分かった」

ディアボロスが腕を戻そうとすると、ターゲットにした男が腕よりも速い速度で、ディアボロスに接近し、同時に飛び膝蹴りを顔面に与える。

怯んだディアボロスに他の二人が銃で援護し、再び三人が固まる。

動きの止まったディアボロスを見て三人の男はマガジンを取り替える。

『汝ら、我に爪を立てた事、後悔するがいい』

不気味に口元を歪めディアボロスは三人の男を睨んだ。

第十六話 出会いと襲撃、そして後悔（後書き）

今回は久々に長い話ですね。

とりあえず気分的にはプロローグが終了して、気合を入れてる状態です。

では、感想御意見などお待ちしております。

PS エアガンのサブレッサーは全然消音効果がありませんね（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951a/>

～ DESTINYブレイド～

2010年10月9日23時38分発行